

# シカゴの公立諸学校とデューイ実験学校における授業

中野 真志

生活科教育講座

## Classes at Public Schools of Chicago and at Dewey's Laboratory School

Shinji NAKANO

(Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education)

### I はじめに

J.M.ライス(Rice)<sup>1)</sup>は、『フォーラム』(*The Forum*)誌の支援によって、1892年1月7日から6月26日までアメリカの初等学校における授業実践の実態と学校経営の在り方との関係を調査した。彼は、この期間にニューヨーク、ボストン、シカゴ、セントルイス、フィラデルフィア、インディアナポリス等、36ヶ所もの都市を巡り、訪問した学校や教室に関して注意深い観察を行った。そして、その結果を9つの論文にまとめ、1892年10月から1893年6月までの『フォーラム』誌で公表したのである。それは多大な反響を得た結果、『合衆国の公立学校システム』(*Public-School System of the United States*)<sup>2)</sup>という本として出版され、より幅広い読者の目に届くようになった。

本小論では、このライスの文献を参考にしながら、デューイ実験学校が存在した当時のシカゴにおける公立小学校の授業実践の実態とその要因について論じた上で、それらをデューイ実験学校の授業実践と比較し考察する。それによって、デューイ実験学校における授業実践の意義と問題点を明らかにするとともに、それをカリキュラム理論の観点から考察する。

### II シカゴの公立諸学校の授業

#### 1 第5学年の地理の授業

シカゴで最も有名な学校の一つで行われていた授業である。第5学年の教室において、生徒たちはヨーロッパ地理の口頭試験を受けていた。進級するために2つの試験に合格するよう義務づけら

れていたのである。ヨーロッパ地理に関するいくつかの一般的な問題に答える他に、壁に掛けた地図の前で、生徒は、ある決まり文句を言った後、ヨーロッパの国の一つについて講義らしきものをしてしなければならなかった。生徒はどの国を選んでも良かった。この授業は、暗記によるワークを象徴していた。

一般的な問題で、教師は、生徒たちに、様々な国の川、首都、山脈、産物等を答えるよう求めた。生徒がこれらの質問に答えた後で、講義の決まり文句の印刷されたカードが与えられた。この講義の間、教師が少しでも支援することは規則違反だったようで、そのカードにあるトピックスは生徒を導くよう意図されていた。そのトピックスとは、第1に、その国にたどり着く方法、第2に国境、第3に山脈、第4に川、第5に産物、第6に居住者、最後に事実であった。事実とは、上述に含まれないことで、生徒がその国について知っていることであった。

ライスが見たある事例では、生徒が答えるのに詰まった時、教師は突然、「考えるのを止めてはいけません。私にあなたが知っていることを言いなさい。」と言った。その教師は決して微笑んだり、励ましたりすることもせず、刑事事件の裁判官のように冷静に椅子に座っていた。地理の授業の間、生徒たちが話したことは、その授業でどれだけ熱心に学習したかを示すのではなく、試験前の2、3日間、教科書か百科事典で詰め込み勉強したことだけを示していた。それは、2、3日の猛勉強で獲得でき、試験後の2、3日で忘れ去られるたぐいの知識であった。話している間、ほとんどの生徒が全身、震えていた。記憶力がよく

あまり緊張しない生徒たちは首尾良くできるが、神経質な生徒たちは、おそらく話し始めるやいなや覚えている半分以上を忘れてしまうだろう。ライスにとって、このような試験は、その苦痛はさておき、科学的な教育学のすべての法則を侵害しているように思われた。この学校の他の教室でも同じような試験が行われていた。

## 2 第1学年、第2学年の読み方の授業

ライスがシカゴのいくつかの学校で参観した読み方の授業は、これまで見た中でも最も異様に思える授業風景であった。それは、生徒に表現しながら読むことを教える方法、デルサルト法に基づく授業であった。ライスは、後にこの種の読み方の授業がシカゴの多くの学校で導入されていることを知った。以下、その授業の詳細である。

第1学年の生徒たちの教室で、校長は、その学年の教師に「口の動きの学習を始めましょう。すぐに開始しなさい。」と言った。校長の要請に応じて、教師はクラスの生徒たちを注目させ、「さあ、あなたたちが口の動きをどんなに上手にできるか見せましょう。」と言った。

約 50 人の生徒たちが、一斉に「a,e,oo」という音を発声し始め、「a,e,oo,a,e,oo」「e,a,oo,e,a,oo」「oo,a,e,oo,a,e」「oo,e,a,oo,e,a」というように、その順序を変えていった。発声する時、生徒たちはできるかぎり口の動きを誇張した。「a」という音を発する時はできるだけ口を大きく広げ、「e」では口の角ができるだけ耳に近づくようし、「oo」では唇が突き出された。生徒たち 50 人が一斉にこのような口の動きをしている間、その表情は非常に奇異であった。

その後で、教師は「あなたたちの舌はだらしくはありませんね。」と言った。50 人の生徒たちは舌を出して四方八方に動かした。校長は舌の動かし方を絶賛した。生徒たちは顔を歪め、舌を動かす方法を系統的に教えられていたのであった。

しかし、口の訓練は、この奇妙な授業方法の一部に過ぎなかった。教師は「口の運動は素晴らしかったですね。では、あなたたちが頭の運動も上手にできるかどうか見せましょう。」と言った。

ライスは、正確に思い出すことはできないが、

と断りながら、次のように描写している。

教師：「頭を後ろに。」  
生徒たち：頭をできるだけ後ろにし（自慢の態度）、「私は自分が何であるか知っているので誇りに思う」とゆっくり目立つよう言う。  
教師：「頭を左の肩の方に」  
生徒たち：頭を左肩の方にして横と上をちらっと見て（称賛の態度）、「それは何と美しいんだろう」と言う。  
教師：「頭を右の肩の方に。」  
生徒たち：頭を右肩の方にして横をちらっと見て（抜け目ない態度）、「あなたは私を欺くことができると思いますか」と言う。  
教師：「頭を下に。」  
生徒たち：頭を胸の方にもって行って（悲しみの態度）、「私のお金が全部なくなった。」と悲しみに沈んだように言う。  
教師：「頭を真っ直ぐに。」  
生徒たち：頭をまっすぐにし（頑固さの態度）、強い調子で、各言葉を発音する時にわずかに頷きながら、「私はそれをしない。」と言う。

頭の運動が終わった時、教師は、今から生徒たちは読む準備をしますと告げた。この準備は、感情を自由自在に表現することが目的であった。その結果、生徒たちは、読み方の授業で文から文へ、段落から段落へ要求された時に、豊かに感情表現する準備ができるというのである。この「準備」は次のように実行された。

教師：生徒たちに注意を向けながら、「オレンジを食べませんか。」と尋る。  
生徒たち：みんな穏やかに微笑む。  
教師：「バナナを食べませんか。」  
生徒たち：微笑みの表情が広がる。  
教師：「キャンディーを食べませんか。」  
生徒たち：微笑みが控えめな笑顔に変わる。  
教師：「アイスクリームを食べませんか」  
生徒たち：できるだけ口を広く開け、満面、笑顔になる。（この時、生徒は喜びの頂点から絶望のどん底に落とされようとしていた。）  
生徒たちがアイスクリームで頭がいっぱいになっていた時、教師は突然、「熊を食べませんか」と言った。

この頭の運動の後、少しの呼吸運動があり、読み方の準備運動は終了する。読み方の授業では、すべての教室で同様の練習が行われていた。以下、生徒たちが読んでいる時の授業の様子である。

第2学年で、教師は、生徒たちに"Appleton's Second Reader."の46頁にある"Be a Good Girl."という物語を読むよう求めた。それぞれの生徒が、2、3の文や段落を読んでいる間、上述の準備運動で行った様々な姿勢をとるのである。ライスは、次のように、その時の生徒の表情や行為は異様としか思えなかったと書いている。

ある生徒が指名され、左手に本を持ちながら立ち上がった。彼女は読み始める前に、本をちらっと見た。それから目をあげ、瞬きひとつせずライスを見つめ、その目が冷淡になった。彼女はゆっくりと慎重に"Be a good girl, Dolly!"と言った。彼女の視線はライスからそれることなく、右手の人差し指をライスに向けて振りながら、"Don't do anything naughty when I am gone."と語った。彼女は一差し指をふり続け、"And Katy shook her finger at Dolly as she opened the door to leave the room."と読んだ。そして、彼女はライスから目を離すことなしに、右手を降ろし、背中の方にもって行って、それぞれの単語にうなずき、ゆっくりと強調しながら、"And what do you think was in Katy's mind when she said this."と言った。

このように悲惨としか思えない方法で、そのクラスの生徒たちが物語の様々な場面を読んでいくのである。アニーという生徒が"Katy stood wondering."と読み、その行為を十分にすることなく、次の文章に進もうとした。教師はすぐに彼女を制して、"You didn't stand wondering. Stand wondering, Annie."と言った。彼女は両手を身体の横腹につけ、わずかに頭をたれながら物思いに沈んだ態度になった。そして、数秒の間、彫像のように動かないままであった。

第2学年の教師は、生徒をととても自然に読ませられるので、この方法が好きだと語った。

### 3 その他の授業

別の教室では、生徒たちは読んでいる間、身の毛がよだつほど辺りを見回し、凝視していた。ラ

イスがそのように告げると、校長は、その部屋は生徒が目を使う方法を練習する部屋で、"eye-room"と呼ばれていると応えた。この部屋の印象は言葉で語るができないものであった。

しかし、この異常な表現方法は読み方の授業だけではなく、他の諸教科でも導入されていた。第2学年の算数の授業で、多くの問題が黒板に書かれていた。ライスが算数の暗唱を聞きたいと言うと、教師は生徒の一人に「ウィリー、第1番目の例をしなさい。」と言った。

ウィリーという生徒は、教室の後ろの方に歩いて行った。そこには算数の実演をするステージがあった。少しの間、気持ちを落ち着かせた後、少年は悲惨に思えるような調子で、"John walked eighteen miles, and Joe walked four miles further. How many miles did Joe walk?"と読んだ。それから答えとなった。"If John walked eighteen miles, and Joe walked four miles further, then Joe walked eighteen miles and four miles, or twenty-two miles."

この実演の間、ピアノシモ、フォルティシモ、クレッシェンド、ディミヌエンドは完璧であった。終わった時、彼は悲劇俳優の雰囲気漂わせながら、自分の席へと戻って行った。

ライスは、このような授業方法はせいぜい自己意識と自己感情の強調を身に付けるだけで、もし日常的にそのように振る舞うならば、嘲りと嘲笑にさらされるであろうと述べ、その正当な根拠を全く見いだすことができないと批判している<sup>3)</sup>。

他の学校の第1学年では、学校ごっこの部屋かと思間違える授業風景であった。例えば、石版に読本からの言葉を書き写していた生徒たちの中には、その書き取りがチョークで書いたハエの足跡と誤解されるほどであった。にもかかわらず、教師は「この学校はこの都市で一番良い学校の一つだという評判です。」と語っていた。

別の学校における第1学年の書き方では、教師は最も旧式の方法を使っていた。その授業で生徒たちが、石版に"a hen"と何度も何度も書いていた。教師は、それぞれの生徒たちのところに行って、"hen"の手本を書いたり、生徒たちの手をとって3度か4度、"hens"と書いたりした。生徒たちは、他に"Mama makes our caps."という一文を石版に

書いていたが、授業の展開は同様であった。

ライスは、シカゴのこのような授業実践に対して非科学的で著しく低水準であり、ニューヨーク、フィラデルフィアよりも遅れていると評して以下のように述べている。

客観的なワークの量は極めてわずかである。低学年ではなおさらであり、理科はカリキュラムに含まれていない。最下級学年の学習は特に無味乾燥であり、機械的であった。すこし歌を歌う以外、生徒たちは、最初の6ヶ月間、一日中、読み、書き、計算する以外何もしない。その単調さを中断する休み時間さえない。急速に成長する学区において、収容施設の不足のため、多くの小学生は半日学校に通学させられている。いくにんかの生徒は午前中に学校に行き、他の生徒は午後に通学するのである<sup>4)</sup>。

彼はまた、シカゴの公立学校システムに関して教師の質が劣っていることも指摘している。シカゴの公立学校の教師で師範学校を卒業した者はわずかであり、ほとんどが専門的な教育を受けておらず、また多くの者が高校のコースを修了させていなかった。さらに、シカゴにはかつて師範学校が存在したが、約10年前に閉鎖されていた。

1892年6月にライスは訪問する前まで、シカゴの教員試験は1年間高校に通った程度の内容であった。その試験に合格した後、教職の志願者たちは、研修生(学級担任のアシスタント)として学校に配属された。その期間、彼らは専門的な教育を何も受けていない大多数の教師たちの授業を観察するのである。また研修期間中、志願者たちは、教育学を学ぶ機会はなかった。2、3ヶ月、アシスタントとして勤務した後、彼らは正規の教師となった<sup>5)</sup>。従って、他の大都市と比較すると、シカゴの教員の資質や能力は、全般的に適切なものではなかった。それゆえ、当時の教育長、A.G. レイン(Lane)は、この状況を憂慮し、師範学校の再設立を強く要求していたのである。

シカゴの公立諸学校の授業実践が低い水準にある主な原因は、明らかに教師の専門的諸能力の著しい欠如であった。ライスは、師範学校を設立し、

専門的な教育を受けた者以外、採用しないことによって改善することを主張しているが、それだけではなく、シカゴの約3000人の現職教員に対して、ニューヨークやフィラデルフィアの公立諸学校において実施されている、教員への徹底した指導と監督の採用も提案している<sup>6)</sup>。

ライスが指摘したように、教員養成と教員の資格の問題、現職教員の訓練と研修、指導と監督の問題は、教育実践のレベルと質という問題にとって極めて重要である<sup>7)</sup>。デューイ実験学校においても確かに、教員の指導と監督という問題に取り組んでいた。しかし、その問題は稿を改めて叙述することにし、本小論では、以下、デューイ実験学校の授業実践について述べ、ライスが看過しているもう一つの重要な問題、カリキュラムの問題について考察する。

### III デューイ実験学校の授業

本節では『初等学校記録』(*The Elementary School Record*)<sup>8)</sup>という資料を用いる。この本はJ. デューイ(Dewey)とL. ラニアン(Runyon)が編集した1900年における実践記録集である。この時期は、幼稚部(Group IとII)の「家庭や家族」を中心とした学習内容とGroup IIIの「社会的オキュペーション」の学習内容が確立し、デューイ実験学校のカリキュラムがほぼ完成した時期である。当時、デューイ実験学校はエリス街5412番地にあった。学校の授業時間は午前9時から12時、午後1時から2時30分であり、8歳以下の子どもたちは午前の部のみであった。

以下、一般的な公立学校の第2学年にあたるグループIVの授業について述べるが、教科や活動等の表題は筆者が付け加えたものである。

#### グループIVの1899年秋の実践

Group IVは平均年齢7歳から7歳半の14人の子どもたちから成り、K. キャンプ(Camp)が担当した。彼女はミシガン大学卒業(理学士)であり、1900年2月当時は、科学と数学部門の部長兼主任であった。ワークの詳細は彼女によって計画され、実行された。Group IVのテーマは以下に示すように「発明とオキュペーションの歴史的な発展」

であった”。

### 物語や劇を通した歴史の学習

様々なキャンプやピクニックの経験が役立ち、子どもたちは想像力を駆使し、今の環境から無くても生活できる物を一つひとつ取り除くことによって、原始的な諸条件に身を置くことができた。この過程で、子どもたちは水は常に必要だと考え、食べ物、敵の小部隊や野生動物から身を守る物を取り除いていった。火や銃のない生活を想像するのが難しかったのであろう。衣服が安全とは無関係だと考え簡単に捨ててしまった。

最初の典型的な段階は、木の多い小高い地域での狩猟時代であった。この時代、住居として木や洞窟が利用されていたので、子どもたちは、食べ物や住居が必要だとわかった。そして、肥沃な河川流域にある原始的な家の進歩をたどっていった。これらの人々の生活の諸条件が、ノルウェーの貝塚における人々の生活と比較された。社会的な組織の基礎として、狩りや防御のために人々が時折、団結していたことも取り上げられた。子どもたちは、団結するには経験豊かな者のリーダーシップが必要だとごく自然に考えた。

次の段階では、弓矢の発明によって、人々は河川流域の低地にある平野に移住した。そこは今、食べ物としている草食動物の最も豊富な場所であった。この狩猟場所への移動によって生活様式が変化し、食事の準備方法だけでなく、武器の改善のために石の硬さ、質感、もろさを調べたり、槍や予備の鏃に最適な石を選んだりすること、さらに住居や衣服の改良による進歩の詳細な分析へと学習が発展していった。

このワークを始めた時、子どもたちにとっては、その時代の自然環境に適応することだけでなく、物語のために自然環境を想像することも難しいとわかった。従って日常生活の最も単純な場面さえ、劇で行うことは困難だった。それゆえ、まず、武器を作ったり、焼く煮るなどの調理するための石を選ぶ作業を行ったりして、人々が使用する素材を用いた実験的なワークを2ヶ月間行った。

その後、S.ワートルロー(Waterloo)の『Ab 物語』(Story of Ab)を学び、2人の少年の出会いと、家より低いところにある平野に落とし穴を作って草

食動物を捕獲する計画を劇で演じることができた。興味深いことに、ワートルローが Ab とオークが知り合いになるのに使った言葉のほとんどを子どもたちが簡単に覚えた。

そして、さらなる劇が春まで行われ、窯や製錬工場の建設のような過程を屋外で継続して行うことができた。例えば、子どもたちは、陶器用の粘土を探すことを提案したが、どこでどのように見つけられるかはわからなかった。平野への移住の劇を行っている時、川を下るとすぐ、ある子どもが突然、小さな川に突き出ている土手で粘土を見つけたことを思い出した。そして、筏で川をくだる実験をすべきだと提案した。

### 科学と地理の学習

どのような種類の場所、平野、丘、高い堤防、低い水面で粘土を発見できるかを明らかにするために、子どもたちは粘土と砂を用いて実験し、水が静まった時に粘土と砂の両方がどのように沈むかを発見した。粘土上の水が完全に透明であることを発見した時、子どもたちは非常に驚いた。粘土が静止しているコップの中でのみ安定しているように、粘土は「静かな水」や「池」に「落ちる」と推測したのである。

子どもたちは川の近くの平地でキャンプしたいと言い、そこで池の底の粘土が天日で乾かされた。そして、河川流域の地図を作った。子どもたちは、平野に湖を作り、砂の模型地図の丘陵地で粘土を混ぜ込んだ水を注ぎながら、下方の湖にそれを定着させ、粘土の湖底を作る実験を提案した。

### 芸術の学習(陶器づくり)

おそらく子どもたちは以前の経験があるので、ボールのようにまるめたり、くりぬいたりして、自分なりの方法で粘土の皿をつくり始めた。ある子どもは、ジャーのようにカップの一番上の部分を小さくした容器をつくらうとしたが上手くできなかった。

粘土の皿をつくる時には、ベリーやナッツのような乾燥食品を保管したり、水を入れたりするという特別な使用方法があった。それゆえ、その形は用途に合わせてつくられた。2日間ほど作業してから、子どもたちはこれまでの経験を教室で話し合った。そして皿づくりの新しい方法を考える

ことができるかと尋ねられた。ある子どもが円筒状のものをつくって、それから皿をつくることを提案した。すると、他の子どもがそのような絵を見たことがあるかどうか質問した。おそらく、その絵を見たことがあると思ったのであろう。しかし、それはふと思ひ浮かんだだけのようであった。

子どもたちは、それから別の一揃いの皿づくりに取り組み始めた。ある子どもが円筒状の方法で皿をつくり出すと、他の子どももそれを真似た。しかし、割れないように粘土を巧みに扱うにはより多くの技能が必要だったので、いく人かは上手くいかず、がっかりしてもとの方法にもどった。

子どもたちは、膝に丸い敷物を置いて円筒状のものを使って鉢をつくっているナバホ族の女性の絵を見せられて、また、この方法への興味が増し、大きい瓶をつくってみた。子どもがつくった最も大きいサイズは直径7インチだった。子どもたちは鉢に色を塗りたいと言ったので、黄土色を与えられた。鉢に付ける模様を抽象化し、直線の帯の中に模様を表すことができた子どもたちは、紙に鉢の絵を描いてから飾り付けをした子どもたちよりも、配置と比率においてはるかに優れていた。

### 芸術の学習（科学との関連）

毎日、ブンゼン・バーナーで薄い粘土の一部を焼く実験に約5分か10分を費やし、鉢が熱せられた時にどのような色になるかを調べた。また、完全に乾燥していない鉢への熱の影響、粉々になる熱の影響を実証した。この実験を見たので、子どもたちの誰もが、自分の鉢を焼きたくなかった。最悪の事態を恐れ、粘土を焼かずに完全な形にしておくことを選んだのである。

教師の提案を受けて、子どもたちは黄土を熱し、「インディアンの赤」と呼ばれている色になったことを発見し喜んだ。それから、子どもたちはナバホ瓶が何によって黒くなったかを尋ねられた。調査の結果、子どもたちのいく人かがインディアンが煤煙を用いたのかもしれないと答えた。

### 工作室での学習

工作室や他の場所で行われた手仕事は、低木の小屋、いかだ、原始的な形の轆轤を作成することであった。手作業の一部としての裁縫は、自分たちが使うための作業袋をつくることだった。

### 織物の学習（歴史との関連）

織物のワークは歴史と関連付けられた。学習は服に使用されているすべての素材から始まり、子どもたちに加工していない状態の繊維が与えられた。絹、羊毛、亜麻を比較してみると、羊毛の繊維が長く粗かったので扱いやすかった。それで、子どもたちは服を作るのに用いる最初の素材として羊毛を選んだ。それから、洗浄、梳毛、手による紡績の過程を少しずつ経験していった。子どもたちは、棒の回転と頂上の回転を結びつけることによって、工作室で原始的な紡錘を作成し使用することを提案した。

### 絵画の学習（歴史との関連）

子どもたちが「歴史」の中で特に興味を持った場面は、芸術の教師と一緒に木炭画と色彩画の挿絵を描く素材を提供した。

### 音楽の学習

年下のグループと同じように、音楽は耳の訓練と作曲から成っていた。

### 調理の学習（算数との関連）

子どもの意見で、調理はクラスの昼食会という形で続けられている。素材を理解するには、昼食の準備が最も良いとわかった。消化しやすくするために熱と水を加えて料理するのであるが、でんぷんとセルロースへの熱と水の影響を最も簡単に応用できる食べ物としてシリアルが使用された。穀物を調理する方法、成分が分離することによって、その変化を簡単に知ることができた。

このグループは、グループIIIと同じ種類だがより難しい比を用いた数のワークを続けた。フレークしたトウモロコシの場合、子どもたちは同量の水が必要であるのを実験によって発見した。フレークした小麦がフレークしたトウモロコシの2倍の重さであるとわかり、2:1の比を使った。挽いた小麦が1:6の比であることもわかった。どの場合でも、子どもたちは、2分の1、4分の1、そして3分の1のカップを使った。子どもたちは、フレークしたトウモロコシに必要な水の量をもとにして、その重さを比較することによって、それぞれのシリアルに必要な水の量を算出した。

子どもたちは、人数分を配るのに必要な量を計算するために同じ方法を利用している。それぞれ

の料理の準備段階で必要な時間、シリアルと水を混ぜる方法、水とお湯の違いを理解した。例えば、子どもたちは沸騰したお湯に混ぜた時、挽いた小麦粉が塊になったことに気付いた。これらを壊して調べることで、それらが調理していない穀物を覆おうことがわかった。冷たい水の場合、この塊は生じなかった。また実験によって、すべての乾燥した穀物を分離するのにどれくらいの水が必要か算出した。それは同じ量であった。それから、調理時間を早くするために、必要な全体量から使った量を引き、沸騰しているお湯の残った部分を加えた。

昼食の準備と同様、調理でもそれぞれの子どもに責任を持たせるようにした。それは個人的に責任を持たせることが大切だからである。従って、ダイニング・ルームの管理と昼食の給仕は交代で個々の子どもに割り当てられていた。

#### 体育の学習

体育館では、子どもたちのゲームや運動は、立ったり座ったりすることで姿勢を良くするのに役立つ、成長の度合いを促進するよう意図された。

#### IV おわりに

上述の二つの実践記録は、シカゴの公立小学校に関しては、第三者であるライスの観察に基づき、デューイ実験学校に関しては実践した教師による報告である。その叙述方法の違いを考慮しなければならないが、描写された授業風景や授業の実態の相違は一目瞭然であろう。

シカゴの公立小学校の授業実践において、例えば5年生の地理の授業で「子どもがどの国を選んでも良いこと」、1年生、2年生の読み方の授業で「デルサルト法を導入していること」、「eye-room」という部屋があること」等、教育における新しい傾向や方法も一部には見られるが、基本的には教師中心の一斉授業、読み・書き・算のスキルの習得、無味乾燥な事柄の暗記、単純な言葉の反復練習が中心の授業である。

このような旧式の教育、授業は、当時、シカゴだけでなく彼が訪問した36都市のほとんどで行われていた<sup>10)</sup>。そして、この教育方法と教育内容

だけではなく、教室には厳しい秩序と規律が存在し、子どもが自由に考え行動できる環境ではなかった。そのことは先述の授業風景から容易に推測できるであろう。例えば、先ほどの地理の授業で、子どもが答えるのに詰まった時、教師は「考えるのを止めてはいけません。私にあなたが知っていることを言いなさい。」と言って、決して微笑んだり、励ましたりもせず、刑事事件の裁判官のように冷静に椅子に座っていたのであった。また、校舎は薄暗く、陰気で、風通しも悪かった。そして教室は狭く、机と椅子がめいっぱい詰め込まれ、子どもたちは机と椅子の間に窮屈そうに座っていたのである。

それとは対照的に、デューイ実践学校では、子どもの学習活動が中心に述べられている。子どもたちは自由に考え、観察し、実験し、発見し、何かをつくり、また、一緒に話し合い、提案しあっている。そのように子どもが自由に学び、活動できるような施設、設備をデューイ実験学校では徐々に備えていった。さらに、その教育内容は、小学校の低学年においてさえ、単なるスキルの習得ではなく、衣・食・住に関連する人間の基本的な諸活動が中心となり、それが歴史、科学、地理、芸術、算数等に関連するように組織化されている。

だが、教師が子どもたちの学習をどのように具体的に支援し指導したかについてはほとんど記述されていない。ノルウェーの貝塚の例で人々の生活諸条件を提示したり、ワーテルローの『Ab物語』物語を語って聞かせたり、ナバホ族の女性の絵を見せたり、皿をつくる新しい方法を尋ねたり、子どもたちに加工していない状態の繊維を与えたりしたことが記述されているだけである。それは、その後、デューイ実験学校の理論と実践が表面的に理解されたり、誤解されたりしながら普及していった一要因だと思われる。また、この学校は私立学校であり、結果として、中産階級以上の子どもがほとんどを占めていたこと、少数の子どもたちを多くの大学卒の優秀な教師が教えていたことは事実であった。その意味で、教師の資質や能力、学校の経費の点において、公立学校では不可能であり、その理論と実践が達成される環境でなかったことも明らかである。

しかし、公立学校における教育理論と教育実践を改善するカリキュラムの理論的、実践的側面では今日においても学ぶべき点は充分にある。最後にその点について述べたい

周知のように、デューイは 1899 年 4 月、保護者たちの前で実験学校の目的を次のように説明している。小学校における伝統的なカリキュラムのもとで、子どもたちの最初の 3 年間の 75% から 80% の学習は、読み・書き・算のスキルの習得に費やされている。そのような学習は必要ではあるが、それだけでは子どもの知的、モラル的発達につながらない。それゆえ、この学校の主要な目的の一つは、子どもを取り巻く世界とその世界に働く諸力および歴史的、社会的発展についての知識、そして様々な芸術の形で自己表現する能力において、本当に習得すべき価値のあることをいかに与えられるかを発見することであった<sup>11)</sup>。

これは、まさに： キュラムの問題であり、デューイ実験学校は、一般にも利用できる教材 (subject matter) をつくり出し公表することを望んでいた。そのために『初等学校記録』を出版したのである。ここでの教材とは、子どもの意識の外側にある客観的な事実、事柄、原理、法則等ではなく、子どもの興味や関心、経験や生活に結びついた学習の素材、対象であった。

それゆえ、子どもがその対象とどのようにかわるかという問題も軽視してはならず、デューイ実験学校では、子どもが問題解決的、探究的、協同的に対象にかかわる学習活動が重視されたのである。さらに、それは学年が上がるにつれて各教科、体系的な学問へと分化し発展していくよう意図されていた。

そのような学習活動の発展的で統合的な組織化をカリキュラムにおいて達成することを可能にしたのが、衣・食・住に関連する人類の基本的な活動であるオキュペーション (料理、栽培、大工仕事、裁縫、織物など) であった。この意味で、カリキュラムの統合の中心を伝統的な教科としたり、抽象的な子どもの自己活動としたりする当時のカリキュラムの理論や実践とは根本的に異なっていたと言えよう。

## 注

1) 合衆国の公立学校に関するライスの調査については下記の先行研究がある。

宇佐美寛「J.M.ライスの公立学校調査—その意義と限界—」、梅根悟監修、世界教育史研究会編『世界教育史大系 1 7 アメリカ教育史 I』講談社、昭和 50 年。

一般にライスは「科学的測定運動の創始者」の一人として、あるいは綴り字の練習方法の研究者として知られているが、この先行研究では当時のアメリカにおける公立学校の教育と教育行政の批判者としてライスを位置づけ、その批判の内容について考察されている。

2) Rice, J. M., *The Public School System of the United States*. New York : Century, 1893.

3) *Ibid.*, p.182.

4) *Ibid.*, p.170.

5) 1893 年 5 月 10 日の教育委員会の会議で、第 1 に、すべての研修生が任命の適任者であるとみなされる前に 5 ヶ月間勤務し、第 2 に、午前中は教室の仕事に専念し、午後からは監督者の指導のもとで教育理論の学習に充てることを要求する法律が通過した。

6) Rice, J. M., *op. cit.*, p.183.

7) ライスは、これらの問題以外に当時の教育委員会のあり方についても指摘している。彼は教育委員会がどのように構成され、どんな仕事をしていったのかを調査したのであった。

8) John Dewey and Laura L. Runyon, (Eds.), *The Elementary School Record* [ a series of nine monographs ], Chicago: University of Chicago Press, 1900.

9) *Ibid.*, pp.23-28.

10) しかし、ライスはインディアナポリス、ミネアポリス、セントポール、レポートにおいては望ましい教育の新しい動きが見られたことを記述している。その内容については、若干ではあるが、宇佐美寛の上掲論文において言及されている。

11) Jackson, Philip W. (Ed. and Introduction), Dewey, John, *The School and Society and The Child and Curriculum*, Chicago: University of Chicago Press, (A Centennial Publication), 1990, pp.167-168.